玉葉和歌集

巻三
夏歌

夏歌の中に　藤原為守女

やみよりもすくなき夜はの蛍かな
おのが光を月にけたれて

永仁二年五月内裏五首歌に野草夏朝
前参議雅有

草ふかき窓の蛍はかげ消えて
あくる色ある野べの白露

守覚法親王家に五十首歌人人によませけるに
覚延法師

かきくらす五月のさ夜のあま雲に
かくれぬほしは蛍なりけり

題しらず　　喜撰法師

このまよりみゆるは谷の蛍かも
いさりにあまの海へゆくかも

？子内親王家歌合に宣旨

草むらにほたるみだるる夕暮は
露の光ぞわかれざりける

千五百番歌合に　　惟明親王

夕まぐれ風につれなき白露は
しのぶにすがるほたるなりけり

千五百番歌合に　　後鳥羽院宮内卿

軒しろき月の光に山かげの
やみをしたひて行く蛍かな

叢間蛍といふことを三条入道左大臣

吹く風になびく沢べの草のはに
　こぼれぬ露やほたるなるらん

？首歌たてまつりし時、水辺蛍　藤原為理朝臣

山かげやくらきいわまのわすれ水
　たえだえみえてとぶほたるかな

巻第十二
恋歌四

題しらず　前中納言隆房

くれをまつおもひはたれもあるものを
　ほたるばかりや身にあまるべき

「国歌大観」より